

「モリイク」は、コープ未来の森づくり基金が、森と人、森づくりと人をつなぐ目的で発行している冊子です。

編集後記

濃紺の空に光の帯が差し、少しずつ明るくなった空に、湿原を流れる川の水面が光を孕みます。振り返れば真っ赤になった月が山の端に沈もうとしている。少しずつ輪郭を取り戻す大地の姿はまだ薄暗いのに、空はもう輝きで眩しいくらい。すると、群青に沈んだ湿原にさっと金色の光が一条差し、あっという間に広がって、今度は一面を茜色に染めます。次には息をつく暇もなく、いっぱい光を受け取って金色に輝き出す葦原の姿。

今回の取材のために訪れた釧路湿原で、夜明け前から湿原を見下ろす丘に佇み日が昇るまでの数十分、感動で寒さも忘れるほどの美しい光景でした。

自然の美しさは、時に息を呑むような感動を私たちに与えてくれます。それは、数千年、数万年の時間をかけて堆積した、土と水と風と生き物たちが織り成す物語です。人間には到底作り得ないこの宝石のような美しさは、ともすればやはり人間によって消し去られてしまう危うさをはらんでいます。壊せば私たちの前からなくなってしまうその切なさ、明日を生きるために森を拓き湿原を干して、必死に生をつないできた人の営みを天秤にかけるジレンマに、ちょっと涙が出そうになった夜明けでした。



<https://www.facebook.com/coop.asumori>

モリイク vol.17
2019年4月発行
発行元/ コープ未来の森づくり基金

この冊子は環境に配慮してベジタブルオイルインクおよび100%再生紙を使用して作成しています。

コープ未来の森づくり基金レポート

モリイク

M O R I - I K U

森に行こう。
森で育とう。
森を、育てよう。

vol.17
Apr. 2019

釧路湿原を守る人は。

湿原を守れるのは森と
地域を織り成す人々の心。



モリイイク

環境保全を進めるために
解決しなければならない問題は。

* contents *

- *02 コラム 森づくりのトレンド
未来のための市民による森づくり
- *04 特集 釧路湿原と保全活動
釧路湿原を保全しようとしたら
思いの外大変だった件
- *08 彼岸と此岸の淡いに
鈴木 果澄さん
- *09 もっと樹のことを語ろう
大きな木の小さな物語
- *10 親子で楽しむ森のページ
森のキモイ・キレイ
- *12 木育essay
手わたし(前編)
- *13 コープ未来の森づくり基金報告
つながる森づくり企画 など

Starting Column 森づくりのトレンド

あした 未来のための 市民による 森づくり

森林や湿原のトラストという、市民がお金を出し合っ
て、守りたい土地を購入して
開発から守る、というイメージ
を持つ方が多いと思いま
す。「トラスト」のもともとの
意味は、「信託」ということ
で、「自分の大切な財産を、
信頼できる人に託し、自分が
決めた目的に沿って大切な
人や自分のために運用・管
理してもらう」仕組みです。
本誌で取り上げるトラスト
は、環境保全を目的として、
土地などの財産の管理をき
ちんと責任をもって保全して
くれる人々に渡すということ

になります。

北海道では本誌に紹介さ
れているトラストサルン釧路
のほかに、知床の100平方
メートル運動による森林再
生、霧多布湿原トラストによ
る湿原保全、ウヨロ環境トラ
ストによる育林・森づくり活
動などが活発に取り組み
られており、それぞれに大きな成
果を上げています。ただ、全
体的に見ると、日本ではトラ
スト運動が活発に取り組み
られている状況ではありません。
その要因としては寄付文
化が定着していないことや、
環境保全運動があまり活発

ではないこと、土地の値段が高
いことなどがあげられます。

国際的に見ると、トラスト
の活動で最も有名なのは、英
国の「ナショナルトラスト」
でしょう。「ナショナルトラ
スト」は世界で初めてのトラ
スト団体で、英国国内最大の
環境・文化保全団体です。多
数の文化財や保全上重要な
土地を所有しており、所有地
の面積は25万ヘクタールに
も及びます。こうしたことか
らトラスト運動のお手本とさ
れますが、一方、違ったア
プローチでトラストに取り組
む地域も

あります。アメリカ合衆国の
マサチューセッツ州など北
東部の州では、地域コミュニ
ティを基礎とした「草の根
トラスト」といった活動が盛
んです。これら地域では水と
緑のネットワークを守るため
に多くの町にトラスト団体が
あり、住民が自分たちでお
金を集めたり、土地所有者
の寄付を受けたり、町の支
援を受けたりしながら、保
全上重要な土地を確保し、
また確保した土地での保
全活動を行っています。

実はこれと似たような取
組みは北海道の中でも行

われています。カタクリで
有名な旭川市の突哨山は、
市民の反対でゴルフ場開
発をストップさせたところ
で、ここを旭川市が買い取
り、現在は市民が主体とな
って管理を行っています。
このように市民の要求で
自治体が森林などを買い取
り、これを市民の手で保全
活動を行っている例は全
国各地にたくさんあります。
冒頭で述べたようなトラ
ストの定義からすれば、こ
のような取り組みもトラ
ストといえるのではない

現在は、森林を開発の手
から守るということととも
に、森林所有者の高齢化
が進み、所有者が管理し
きれなくなった森林をど
う管理するのが大きな課
題となっています。森林
を保全することとともに、
森林をだれが所有するの
か、だれが管理するのが
改めて考えることが必要
な時代になってきていま
す。✳



柿澤 宏昭
(かきざわ ひろあき)

北海道大学
森林政策学研究室 教授
コープ未来の森づくり基金 運営委員長
1959年神奈川県横浜市生まれ。
北海道大学大学院農学研究所
修士課程修了。現在、北海道
大学農学部森林政策学研究室
教授。持続的な森林管理を多
様な人々の協力で支えるしく
みづくりをテーマに研究を行
っている。また、欧米、ロシア
などの森林管理政策にも詳
しい。主な著作に『エコシス
テムマネジメント』(築地書館)。
2008年より「コープ未来の
森づくり基金」運営委員長を
務める。

とっもたい 釧路湿原を 保全しようとしたら 思いの外 大変だった件

NPO法人トラストサルン釧路 <http://trustsarun.life.cocan.jp/>

釧路湿原、 日本最大の湿地帯

釧路湿原といえばわずと知れた日本最大の湿原にして天然記念物であり国立公園です。約2万ヘクタールに及ぶ広大な湿地帯は類稀なる景観を私たちに見せてくれるだけでなく、命のゆりかごと比喻されるほどにその懐に生命を抱く生物多様性の宝庫でもあります。あるいは広大なその身には莫大な水を貯め、天然の貯水庫となっているほか、その広大さから気候を穏やかに保つ作用もあるとされています。記憶に新しいのは2018年の台風で、豪雨で降った雨水をいっぱい貯めた湿原は釧路の市街地を水害から守ったといわれています。湿原が私たちにもたらす生態系サービスは、実は値段がつけられないほど大きいのです。

そんな釧路湿原は当然のことながら古くから価値が注目されていました。天然記念物に国が指定したのが1967年、

長い渡りをする水鳥たちにとって重要な湿地であることから、その保護を目的とした「ラムサール条約」に登録されたのが1980年、国立公園として厳重に保護されるようになったのが1987年と、その保全の必要性は社会的にも認められてきました。

そんな中で釧路湿原の環境保全に乗り出したのが「NPO法人トラストサルン釧路」。2019年で30周年を迎える老舗の市民環境保護団体です。

ナショナルトラストで 環境を保全する

ところで、「ナショナルトラスト(トラスト)」という言葉聞いたことはありますか？ これは、日本でも多く行われている環境保全の手法で、市民や企業から寄付を募って土地を買い取り、開発などからその環境を守るという市民活動です。発祥はイギリスで、ピーターラビットのふるさとである湖水地方をはじめとして貴重な自然環境や歴史的建

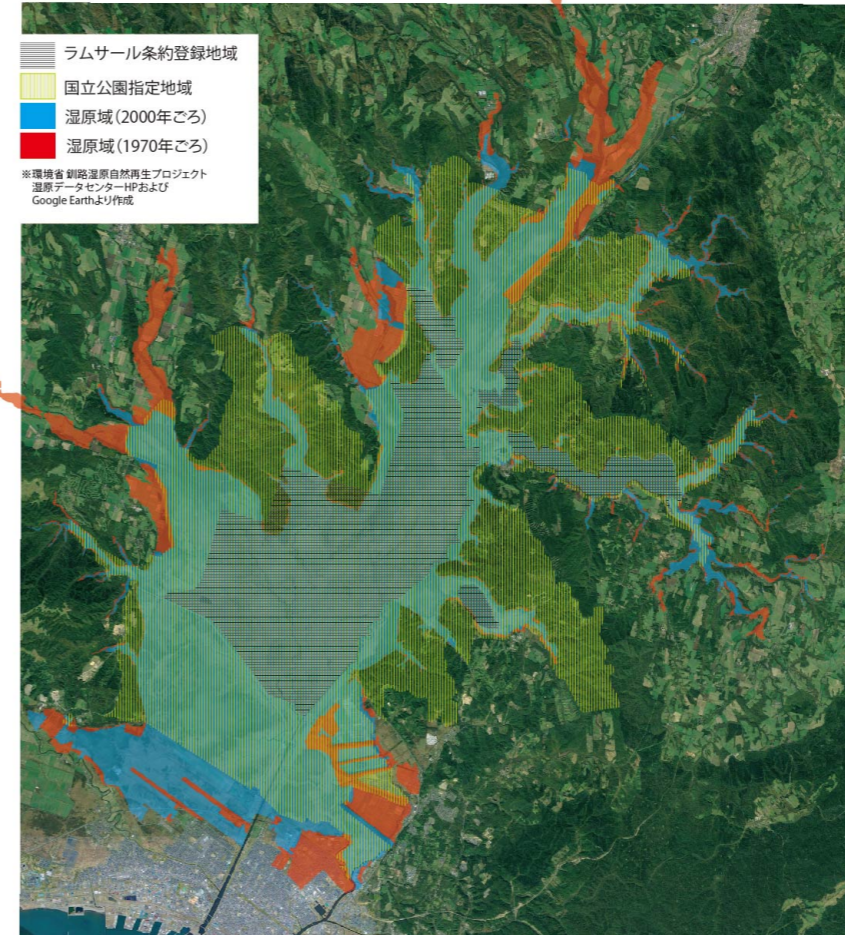
造物など、保全が求められる多くの物件がこの運動によって開発の手を免れました。また、国もナショナルトラスト法を整備して保護を下支えしています。

日本ではイギリスほど広く認知された活動ではなく、法整備など行政からのバックアップも十分ではありませんが、知床の100平方メートル運動をはじめとして、多くの環境保全の活動で取り入れられています。トラストサルン釧路も、その団体名が示す通りトラスト運動を基本に釧路湿原の保全を目指している団体です。

その活動は、ひとつは土地の購入と保全、もうひとつは一般の人向けに行う自然観察会や水鳥観察会、そして緑化活動など。緑化活動は、植樹や育樹などの森づくりです。

30年にわたって続くこの活動ですが、釧路湿原の保全活動にはさまざまな事情や課題があるのだとか。今回は、広大な土地を保全する、ということの困難や課題についてお話を伺いました。

釧路湿原と保全の状況。湿原の減少傾向と、湿原やその周辺環境への保全の網が十分ではないことがよくわかる



市民とともに緑化(森づくり)活動(上)と、ナショナルトラストで取得した土地(下)



釧路湿原の保全は
大変だなあ、
とは思ってました。

話して
くれた人

黒澤 信道 さん
NPO法人トラストサルン釧路
理事長



失われてゆく 貴重な環境を保全せよ

釧路湿原は、その類い稀な広大さと特異な環境から研究者たちの注目を集めていました。それだけに保全への関心も高く、国立公園という形で環境全体を保全していく動きとなったのです。

一方で、湿原の保全が厳重に求められるようになった裏には、どんどんその姿が失われていくという現実があったようです。

北海道では、湿原は古くから排水・乾燥化されて農地に姿を変えていきました。札幌近郊の石狩川流域にも、昔は広大な湿地帯がありましたが、今では農地へと姿を変え、気づけば当時の環境の面影を残した貴重で小さな湿地が点在しているだけとなってしまっています。釧路湿原も同様に、乾燥化・農地化が進みました。

また、釧路湿原の国立公園指定があった1980年代はバブル期でした。湿原の周囲にはゴルフ場や別荘地の開発計画がひしめき、切り売りするように周辺の土地も開発されていったのです。その最中の国立公園指定で、保護が必要な箇所に十分に網をかけられたわけではありませんでした。バブル景気に後押しされた国土開発という国策に、環境保護が十分に抗えない時代だったこともあったのでしょう。湿原の乾燥化は現在でも続いており、ヤチハンノキの群落が増えるなど、その景観からも変化は見て

取れるほどなのです。

湿原の環境を守るためには、そこだけを保全すればいいわけではありません。湿原はその名が示す通り、周囲からたくさんの水が集まって生まれる環境で、周囲からの水の供給が必要不可欠なのです。そのためには、水源である湿原周辺の森林を保全すること、ひいては湿原の動脈ともいえる釧路川など、流れ込む河川の流域そのものを保全するという大変な作業が必要になります。釧路湿原の保全が難しい理由の一つは、ただでさえ広い湿原の、その周辺のさらに広大な地域の環境を保たねばならない点にあるのです。

トラストサルン釧路、 30年続く保全活動

「国立公園の区域になって保全されているところはいいんです。国に任せておけばね。私たちが購入しているのは保全の網から漏れた湿原や、周辺の山林なんです」と話すのは、トラストサルン釧路の理事長、黒澤さん。野鳥の観察が好きで湿原に興味を持ち、霧多布湿原の保護活動にも携わって、今では釧路湿原の保全を目指すトラスト団体「トラストサルン釧路」のリーダーとなっています。この団体が保有する土地は29箇所、500ヘクタール以上（2019年2月現在）。国立公園による保全だけでは、釧路湿

原を守るには十分ではないと考えた有志が集まり、以来30年にわたって寄付を募り、土地を購入してきました。

購入する土地はさまざま。寄付や官公庁による競売、はたまた原野商法で売られたどうにもできない土地など。森林だけでなく、皆伐されてほったらかしとなった山などもあるため、そういった土地には緑化活動として、地元の種から苗を育てて植樹し、森づくりを行っています。それでも、保全に必要な土地のごく一部にすぎません。

広いことが、 保全を難しくしている

「釧路湿原は難しいんです。こんなに広いから」と黒澤さんがいうのは、膨大な面積を保全しなければならないだけでなく、釧路湿原だけで5つの市町村と隣接していますし、土地も私有地、農地と入り組んでいるという難しさもあるから。たとえば、必死になって排水と乾燥化を進めてどうにか農地を作ってきた農

家さんにとっては、保全活動によって水位が上がリ、せっかくの農地がだめになってしまうことも。釧路湿原を保全しようといってみても複雑にからみあった利害関係もあり、一筋縄ではいかない事情があるのです。

一方で国が主導して自然度を回復させようというまとまった動きもあります。「釧路湿原自然再生プロジェクト」は、環境省や国交省が中心となって協議会を設立し、排水のために直線化した釧路川を蛇行した川に戻すなど、大規模な視点から自然再生を目指すものです。

しかし、この大きな動きも国主導が過ぎるためか、地元の共感を得られにくいという実態もあるようです。

そもそも、湿原を排水して農地を造成することは国策で進められてきましたが、今は180度転換して湿原の保全を目指しています。川を蛇行に戻すことで水に浸かった農地もあります。地元の人にとっては、観光客は来るけど湿原はあっても便利なものではない。開発だ保全だといわ

れてよいイメージの持ちようがないのもひとつの本音ではないでしょうか。

そんな地元の人たちのイメージを変えるためにも、湿原と保全のことをもっと知ってもらいたいし、その努力が必要なのだそう。湿原や保全への理解が進めば、「たとえば地主が湿原に負担をかけないような土地管理をしてくれればいいし、私たちのほかにトラストができたり、企業が社有林を保全したり、いろんな形で保全が進めばいい」と、様々な人がともに保全に乗り出せるのだといいます。「そのためにもっといろんなアクションがあってもいい。私たちだけが頑張ってもだめ。市民を巻き込んだり、市町村をやる気にさせるような取り組みが必要だと思う」というように、国だけでもだめ、ひとつの保全団体だけでもだめ。みんなと一緒に歩調を合わせて進めなければ、広い釧路湿原を保全していくことは難しいのだと黒澤さんは話してくれました。

様々な壁を乗り越え 市民が誇る湿原へ

釧路湿原で現在進んでいる変化は各河川からの土砂の流入が原因だろうと考えられています。そして川で運ばれる土砂は、流域の森林の状態や河川の改修工事から生まれると推測されるのです。

「下流だけ直してもだめなんです。でも川上で起こることにはなかなか手が出せない」。湿原を守る壁は未だに高く、険しいといえます。それこそ昔は多少無理やりでも干拓したり排水して農地を造ってきたし、環境保全と農家の軋轢が激しいこともあったのだそう。でも時代は変化していて、今は湿原の重要性は広く認識されていて、どうやって共存していくかという話ができてきている。つまり、湿原を保全するための話し合いができる下地は固まってきたといいます。

保全活動のゴールについて黒澤さんに聞くと、「湿原の生き物たちが自分たちのすぐ近くに暮らしている、そのことを地元のひとたちが自慢できるようになればいい」と話します。湿原の状態が今よりよくなって、市民が景観や生き物を不断に楽しむ。それができるのは周りの森や川がしっかりしているからだと理解できている。そして釧路湿原という類い稀な環境が、自分たちの町にあり、誇りに思える。釧路湿原というものの「大きさ」をみんなが知っている「本当の意味での共生になればいいと思いますよ」と黒澤さんは言葉を結びました。

様々な問題をほらみつつ、周囲の状況は刻々と変化しつつも、釧路湿原は今日も水をたたえ、たくさんの命をその身に抱き、豊かな水環境を私たちに与えてくれています。まずは私たちがそのことを理解すること。釧路湿原の保全という広く長い道のりは、ここから始まるのかもしれません。✂

「あすもり座」のことをご存知ですか？ そう、道内のコープの森をつないでみんなが色を塗った小さな木が北海道中を埋めて、こんなカラフルな森が育つようにと祈りを込めた大きな絵です*。素敵な詩を添えて美しい青で「あすもり座」を描いてくれたのが画家・イラストレーターの鈴木果澄さんです。

鈴木さんの絵には森の動物たちが楽しそうに踊り、野の草花や木々が謳いあっているささやいています。見ていると、まるで春の森の中にいるような気分になるのです。一方で、ちょうど夜の森でふと感じるような、何かの気配がただよっている、闇の向こうからじっと見られている、そんな気分になる不思議な作品も制作しています。

そしてどちらも共通しているのが、時に優しくったり、時に底知れない奥深さに気づかされたりする、「森」の気配なのです。

鈴木さんがこうした生き物たちをモチーフに描き始めたきっかけは、星野道夫の写真だといいます。「写っているムース（ヘラジカ）の中に風景が見えたような気がしたんです」。

そこから自然と自分のつながりに思いを馳せたのが最初なのだそう。また、幼少の頃からカヌーやキャンプで自然の中で遊んでいたで、その時に触れ合った野の生き物たちが絵の中に現れてきたのは自然な流れだったようで「心の向きたい方向、その風景の中に生き物たちがいるんです」と話してくれました。今でも雪がない時期には毎日のようにアトリエからつながる山に入るのだそうです。きっとそんな日々の眼差しが、春の森の色彩のような絵として生まれるのでしょう。

*モリイク14号をご覧ください。



彼岸と此岸の淡いに

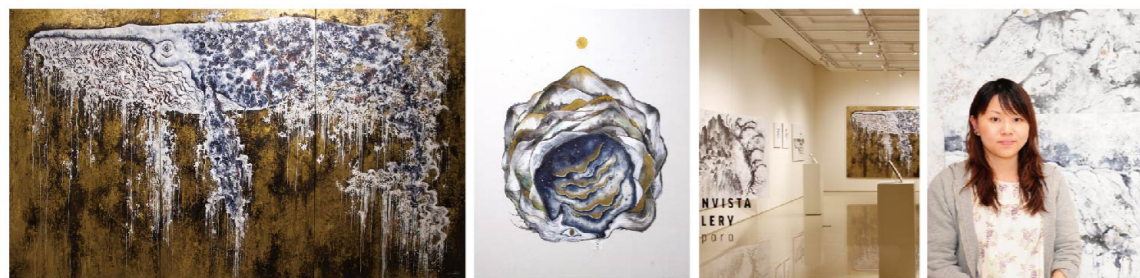
鈴木 果澄さん
www.visionquest-jp.com/kasumin/

さて、同じく生き物や山などの風景をモチーフにしていながら、全く雰囲気の違いを感じる作品を描くことも鈴木さんの仕事の魅力なのです。

モノクロームの山々からじっとこちらを見つめる獣たちの眼、彼岸花の向こう側に溶け出すような大きなクジラなど、心の奥底で見たものを描いたような作品たち。これらの表現は自分への原点回帰、自分の向きたい方向を見失わないための創作なのだとか。「周囲からの評価がとても気になっていた時期があって、行き詰まって大事なものを忘れてしまったような気がしたんです。だからいったん自分のドアを閉じることにしました」と、過去に迷い、苦しんだ自分がいたことを語ります。そうした中で生まれたのは、どこか儚げで捉えどころがないのだけれど、自然への畏怖や、山と海と生き物たちと自分が、彼岸と此岸の淡いつながっていることを心の一段深い場所で感じ入る、例えるなら深い森に立ち入ってふと目にした風景のような、そんな作品たちなのです。

春の森を覗き込んだような生き物たちのきらめき、夜の闇に沈んだ、彼岸と此岸の境目のような畏れを含んだ森の静けさ。鈴木さんの絵の前に立つと、そんな気配を感じることが出来ます。そう、そこにあるのは確かに森の入り口です。鈴木さんにとって、作品の出どころである山や森は、「行き詰まった時に自分の原点を教えてくれる場所」でもあるといいます。だから、ちょっと自分を見失ったときには鈴木さんの絵の前に立ち止まってください。自分の中の森へとつながる扉が、そっと押されるのを感じるかもしれません。*

個々の生き物というより、風景として描くという鈴木果澄さん(右)と「精霊の樹」(タイトル上)。最近モノクロームの世界観を描く「白鯨」(左)と「おおかみの棲む湖」(中左)などの作品には自然への畏怖や、彼岸と此岸とのつながりへの思いを込める。これらの作品は2019年の冬に行われた個展「九十九山」(中右)で展示された。



大きな木の小さな物語

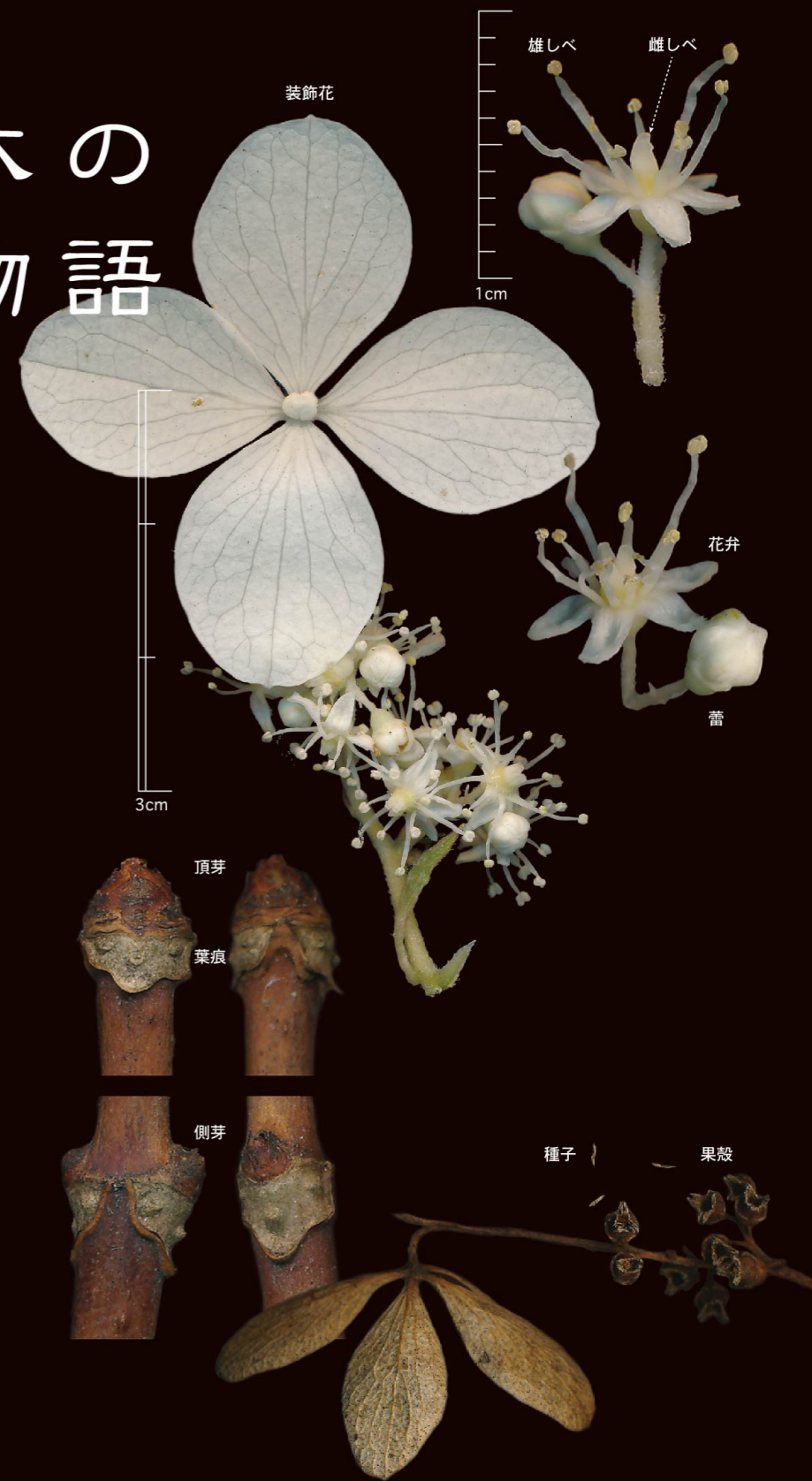
⑫ ノリウツギ

ノリウツギは高さ5mほどになる落葉広葉樹の低木で、北海道全域に分布しています。ひよっとしたラビタの方がなじみ深いでしょうか。

湿原周辺などのやや湿った明るいところで生育し、夏には白い円錐状の花をつけます。ノリウツギはアジサイの仲間。白い花びらに見えるのは本当の花ではなく、装飾花や中性花・偽花と呼ばれる萼が変化したものです。本当の花は装飾花の隣にあるつぶつぶ。よく見ると5枚の花びらに10本の雄しべ、そして1本の雌しべがちゃんとあります。白い大きな装飾花をつけるのは虫たちの関心を引いて、花粉を運んでもらいやすくするための工夫です。ところがある時点から装飾花は下を向きます。うなだれたようにさえ見えます。これは「もう受粉しましたよ」というノリウツギから虫たちへ送るサインです。親切心なのか、それともほかに理由があるのかしら。

ノリウツギという名は、その利用と幹の構造から名づけられました。ノリは「糊(のり)」。樹皮の内側の内皮と呼ばれる部分をきれいにほぎ取って水に漬けると、和紙をつくるときの糊ができます。ウツギは「空木(うつぎ)」。幹の中心にある髄と呼ばれる部分がとても柔らかく、空洞であるかのように針金が通ってしまいます。70年以上も前の話になりますが、糊は本州に移出されていたそうです。このためか、当時の函館営林局では樹齢と太さの関係のデータをとったりしていました。太さ4cmに達するのに20年ほどかかるようです。かつては髄が柔らかいことを利用してパイプをつくったり、材が堅いことを利用してステッキをつくったりして、「サビタ細工」という名で出回っていたそうです。

ところで「サビタ」、これはアイヌ語ではありません。沢の出口などに生育するので「沢に蓋をしたようだ」ということでサワブタに、やがて転訛してサビタになったと考えられています。*



text/images 孫田 敏

*54年山形県長井市生まれ。'77年北大農学部林学科卒業。林業、その後造園・緑化工事に従事。'90年から建設コンサルタント。緑化計画が専門。技術士(建設部門:建設環境)。'00年から北の里山の会代表。著書:アトリウムと植生(積雪寒冷地型アトリウムの計画と設計:絵内正道編著)、水辺林復元計画の基本的考え方と計画の進め方(水辺域管理—その理論・技術と実践—:砂防学会編)、森林管理と市民参加(北のランドスケープ 保全と創造:浅川昭一郎編著) WEBサイト「Scan Botanica」http://scanbotanica00.sblo.jp



木のキモイキレイ
 のぞいてみたら何かがいるよ。
 ちょっとキモいわない？
 よく見るとおもしろい！
 さがしてみよう、森のいきもの。
 ほら、いのちのふしぎにあふれてる。

キノコを楽しむシリーズの3回目は、発見が
 キノコ目(キノコが見える目)を鍛えてはじめて
 虫を苗床にして生きるハンテコなキノコ。
 知れば知るほど楽しくなる、小さい世界を
 むずかしく、
 出合える冬虫夏草を紹介。
 森の地面をよ〜く見て、
 のぞいてみよう！

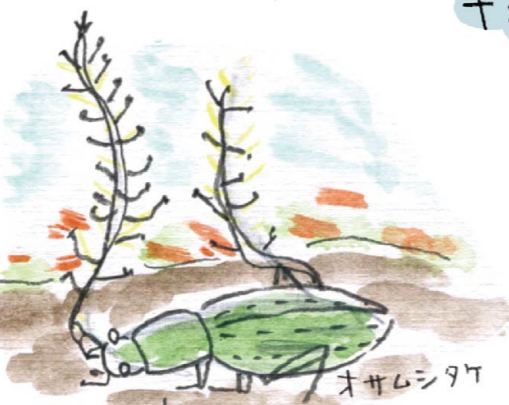
冬虫夏草の見つけ方

- 発生に適した条件
- ① 夏〜秋に雨による水分が豊富
 - ② 地形が複雑で、いろんな環境がある
 - ③ 宿主となる虫の種数が多い
 - ④ 古い森林があちこちにある



え！虫からキノコ？

キノコは、いろいろな生き物とのつながりの中で生きている。中でも昆虫やクモなどの虫を宿主に選び、寄生して生きる、最高にふしぎなキノコのグループが「冬虫夏草」だ。古代中国で「冬の間は虫の姿をしているが、夏になると草(植物)になる生き物」と思われていたからこの名前がついたんだ。中国ではコウモリガの幼虫に生えるものだけを「冬虫夏草」と呼び、薬として珍重している。



宿主の虫のカタチがわかるもの
 土にかえてカタチの
 わからぬもの
 見た目も種類も多様です

キノコがマニアの行き着くところ
 キミには見える？



冬虫夏草にはそれぞれ好みの虫がいる。
 セミのいない場所に
 セミタケは生えていない。
 だから、
 虫の生息地のことも
 調べてみよう。



- ① ゆっくり歩く・立ち止まってじっと見よう。
 時には地面にひざまずいて、じっくり眺めて観察するべし。
- ② 目の前にあるすべてを解説してみよう。
 「これはあの草の根、これはあの葉っぱの切れ端、これはあの木の葉の一部、これはあの虫の糞、これはあの手のキノコの根状菌糸束...と、片っ端からすべてを認識・分類していきましょう。そのどれにも当てはまらないものが、冬虫夏草です」というのは冬虫夏草の大家・清水大典先生の言葉。
- ③ 虫の居るうなところを探そう。
 宿主となる虫がどこで暮らしているかを知るべし。たとえば、ハチタケが寄生するスズメバチ類はマツ林の地面で越冬するなど。湿り気の多いところが狙い目。
- ④ 冬虫夏草はどんな姿かを知っておこう。
 カタチのイメージがあると発見しやすい。図鑑をよく見てから出かけよう。

冬虫夏草は謎だらけ！

虫を栄養源として生きる冬虫夏草。たとえばセミの幼虫に生える「セミタケ」は地中で暮らす7〜8年のどの成長段階でキノコの胞子や菌糸に命を奪われているのかわかっていない。木の根の養分を吸って生きる幼虫、その幼虫を攻撃するキノコ。地中の小さな世界では命のせめぎ合いが日々繰り返されているんだね。



もしかして？冬虫夏草がどうか見分けるポイント

「これはもしかしたら冬虫夏草かな？」
 と思うものを見つけたら、表面をルーペやカメラのマクロモードでよく見てみよう。
 ミカンの皮みたいなツブツブ模様が、普通のキノコには見られない冬虫夏草の特徴。確認できたらそれは冬虫夏草の可能性高し！
 子実体が粉にまみれたような「コナコナ型」のタイプもあるよ。

冬虫夏草探索は、地面にひざまずき、意識を集中します。そうして過ごす時間は、まるで森と自分が一体化するような、不思議な安心感と充実感に満たされます。お目当ての冬虫夏草が見つからなくても、そのようにして過ごす森での時間は有意義なものだと思います。また、冬虫夏草を探すには宿主となる虫と、木や地形・地質など、森の環境と生態系を複層的に把握することが必要なので、宿主の虫の生息環境をまず調べるなど、より全体的に森をイメージする楽しさがあります。
 冬虫夏草を見ている人が多ければ、それだけ見つかる可能性も高まります。さあ、あなたも明日から、身近な森や公園、庭先で冬虫夏草を探してみませんか？少し目を向けさえすれば、世界は驚異にあふれていることに気付くでしょう！

北海道で見つけた冬虫夏草いろいろ

探索難易度
 ★ たくさんある。目立つのですぐわかる
 ★★ 多くない。小さくて見つけづらい
 ★★★ 非常に少ない。地味だったり小さくて、とても見つけにくい



★★ ギベルラ 宿主：クモ類
 やや湿り気のあるササ藪の、茎の下の方に発生するとともに小さいキノコ。宿主は小型のクモ。8月〜9月に発生。

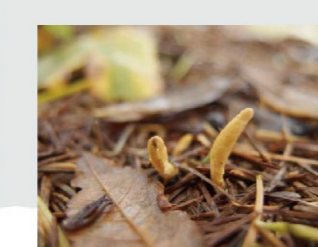
★ ハチタケ 宿主：ホオナガスズメバチやクロスズメバチ類など
 トドマツ林の地面で7月下旬〜9月中旬くらいまで発生。トドマツの枯葉の中にもぐって越冬しているクロスズメバチ類の女王蜂に寄生するようだ。ハチの種類によって子実体の頭の部分が大きかったり小さかったりするが、いまのところは全部「ハチタケ」とされる。



★ ガヤドリナガミツブタケ 宿主：ガの成虫
 がある環境ならどこでも見つかる可能性がある。たぶん、7月〜10月ごろ発生する。



★ エゾコガネムシタケ 宿主：コガネムシの幼虫
 森の地面や登山道わきなどでよく見る。7月下旬〜10月上旬くらいまで発生する。色ははっきりしていて、子実体(キノコ部分)は1〜3本くらい出ていることが多い。宿主のコガネムシの幼虫はすぐ土に還ってしまうため掘っても虫が見つからないことが多い。



★★ オサムシタケ 宿主：オサムシ類の幼虫や成虫
 9月下旬、トドマツ林に通じる林道わきの側溝で発見。エゾマイカブリなどの幼虫や成虫に生えたとされているが、掘っても宿主を特定するのは難しい。



★★ テップオウムシタケ 宿主：大型のカミキリムシ
 巨大。虫体を含めると10cm以上もある。宿主がヒゲナガカミキリ類などの大型のカミキリムシなのでそこに生えるキノコも破格のサイズ。

マルミノコツブコガネムシタケ
 ★★★ 宿主：コガネムシ類の幼虫
 見つけることが困難な冬虫夏草の最高峰。トドマツ林の地面に、地味で小さく生える。ついに見つけた!と思ったら...フデタケだったりして、よく似ているが冬虫夏草ではない。

もっと知りたくなったら...



冬虫夏草ハンドブック
 森口満著/安田守写真
 文一総合出版



「森林インストラクター」と「きのこアドバイザー」。得意分野は野生のキノコ。ニセコグラン・ヒラフスキー場の自然の魅力をお伝えする展示・自然ガイド施設「自然情報室エコー」を担当し、ガイドしています。(株)東急リゾートサービス勤務。大阪府出身。大谷大学文学部哲学科卒業。

400種類も！冬虫夏草の天国、日本

世界で見つかった冬虫夏草は500種くらい。そのうち日本にはなんと400種あまりが見つかったりよ。冬虫夏草にとって日本の環境はとっても棲みやすい土地なんだね。



morinoko

新田薫/エトブン社
 北海道のイキモノをテーマに絵と文を描いているイラストレーター。トカゲと鳥とエゾシカが気になる。猫とキツネを見たら追いかけ。クモはちょっとコワイ。好きなことは森と動物園と水族館の散歩。札幌出身。
 ブログ <http://etobunshaimyzeo.blogspot.com/>



宮本尚/きたネット
 森好き、へんなイキモノ/好きは、オホーツク海を眺めて育った子どもの頃から。最近はキノコのトリコ。しばらくやっていたライブ活動を再開。シンガーソングライターです。
 きたネット <http://kitanet.org>

手 わ た し 前編

今日は、ある道具の話をしよと思う。不思議な縁で私のところにやって来た、美しいナイフの話。

ある年、私たち夫婦は旅に出た。京都、金沢、三重と二週間に及ぶ旅は、知人への土産から身の回りの物、それに寝袋と一切合切を車に詰め込んで、基本的には車中泊のタフな旅だった。

いい年をして、それまで都会的な生活を送ってきた私たちがなぜ、若者の真似事のような旅の仕方を選択したのかは今だに分からない。しかし当時は二人して勤め人を辞めて、新しい生き方をしようとしていた矢先だった。だとすればそれは、それまでの日常と決別して異なる価値観を持つ世界に入っていくために、必要な準備だったのかもしれない。

旅の目的も観光ではなかった。木育をめぐる旅と言ってもいい。森林や木工所、木製品の工房をたずねた。奥深い里に住んで、草木染めやカフェを営んでいる友人たちの家に泊めてもらったりもした。そこで様々なものを見、話を聞いた。巡礼のようにした旅の一つひとつが、私たちの血となり肉となった。

旅の中で、ある時友人が連れて行ってくれた鋸鍛冶屋の主人は、80歳を越えて豊饒とした職人だった。

「鋸鍛冶職人は目が良くなっちゃ駄目なんだ。鋸の刃は細かいからね。鋸鍛冶は刀鍛冶より難しいんだよ」

父の後を継いで職人になった彼は自慢げにそう言った。張りのある声と目の輝きが印象的だった。

男たちが鋸を注文したり道具の話に興じたりしているあいだ、私は商品がびっしりと並べられている店内を眺めていた。

「何か欲しいものはあるかい？」
言われて私はとまどった。それから、ふと思いついて、
「シラカバの皮を剥ぐナイフはありますか？」

とたずねた。その頃、ロシアや北欧の国で古くからあるシラカバ細工の工芸品が、北海道で地元の木から作られるようになったと聞いていたからだ。私も自林のシラカバで試してみたいと思っていた。ある人が見せてくれた外国製のナイフを思い出したのだ。

しかし居合わせた人の中でそういうナイフを知っている人はいなかった。それはそうだろう。シラカバは寒地の木だ。残念、と思っていたら誰かがスマホのネットで画像を見せてくれる。これかい？ うん、そうそう。

「うーん、こういうのはないなあ。既製品を加工すれば……」
サバイバルナイフのカタログを見ながら首をひねっている。ここを削って、あそこをこうして……。

「いっそ最初から作ってしまおう」
主人は言う。奥の方に行って、何やら探し出して来た。
それは長さになると50センチ足らずの、黒っぽい金属の棒のようなものだった。



text/ 齊藤 香里
介護事業所での管理職などを経て、現在は夫とともに『よいよい木育倶楽部』を運営し、木育の活動を行っている。介護福祉士、ケアマネジャー、木育マイスター。

つづく

Event Report

つながる森づくり企画

コープさっぽろの各地区委員会が独自に森のことや環境について学びます。それぞれ特色ある企画をちょっと拝見。

函館地区 森は環・つながっている

冬の香りが漂い始めた11月29日、函館の「四季の杜公園」には15名が集まりました。この企画のテーマはきのこ。森の中でどんな役割をしているのか、どんな種類のきのこがあるのか、みなさん興味津々。函館きのこの会の会長さんを講師に、まずはきのこのお話。きのこはカビの仲間であることや、私たちが見ているきのこは、本当の姿ではないこと、木の生長を助けたり森を若返せたりと、森の循環について大切な役割があることなど、目から鱗のお話でした。そしていよいよ外へ。

雪がちらつく中ですが、枯れ枝や倒木にはきのこがちゃんと生えていて、たくさん観察することができました。昼食にはもちろんきのこ汁と地元生産者が育てた原木しいたけの炊き込みご飯できのこを楽しみ、午後からは森の材料を使ったメモスタンドをみんなで作りました。森の循環の要はきのこ。そんな知られざる姿を学び、楽しんだ1日でした。



モリイク「キモイキレイ」のきのこ特集がきっかけで企画しました。



伊沢さん 坂井さん

南空知・石狩B地区 親子企画 旭山動物園・冬の動物たちと会いに行こう

つめた〜い冬の空気が北海道を覆った1月11日、大雪の道央圏を抜けて到着した旭川は快晴！バスから降りた23名の参加者はマイナス10℃の空気を胸いっぱい吸い込み、旭山動物園の中に歩いて行きました。

本当ならこの企画は秋に札幌市内の動物園で実施予定だったのですが、北海道胆振東部地震の影響で冬に延期に。遠出が難しい季節だからどうせなら遠くに行く機会を作りたい。それなら旭山動物園まで行こうじゃないかとやってきたのです。いつもは大人向けの企画が多いのですが、今回は親子が対象。冬に外に出る機会になったり、いろんな動物を見ることで世界中の環境や森のことを知るきっかけにしてほしいというねらいがありました。参加した子どもは大好きなキリンを見ることができたり、ペンギンのお散歩を間近で見たりと、日常と離れた冬の日を楽しんだのでした。



冬だからこそ、外で子どもと過ごす機会を（私たちも楽しみたい！）



村田さん 庄司さん 清水口さん

富良野自然塾とつらぼ企画 46億年・地球の道を歩こう in 円山動物園

地球の歴史を「歩いて」、私たちのこれからを考えてみる

5月20日の札幌市円山動物園は、地球と動物たちのことを考えるイベント、「アースデイ in 円山動物園」が開催されていて、いろんな団体が来園者に環境問題を考えるきっかけを提供していました。その一角に登場したのが「46億年・地球の道」。富良野自然塾が提供する環境教育プログラムです。

道中を地球の歴史にたとえて森の中を歩くのですが、その途中にはスノーボールアースや火山の大噴火など、地球と生命のイベントが配置されていて、巧みな話術でインストラクターが解説してくれます。そして、思ったよりも長く歩いた道の最後の最後、やっと人類が誕生して、あっという間に地球の資源を使い尽くしてしまうというストーリー。ここからの道が続くかどうかは、人間が未来を想像し、変化していけるかどうかにかかっているのだということ、森の中の一本の道の上で考えたひと時でした。このプログラムは道内の他の動物園でも展開しました。



Event Report

第9回 北海道の森づくり交流会

楽しいことを考えて未来の森をつないでいこう、森づくりの担い手たち!

9回目を迎えた森づくり交流会、今年もたくさんの方が参加してくれました。今回の講師は岩手大学の山本信次先生。森林ボランティアがどのように生まれてきたのか、どう活躍し、森づくりにどんな可能性を投げかけているのかについて講演いただきました。森林保護の市民運動は様々な形を経て、今は問題解決の手法として多様な関わりの中で行われています。人の暮らしによって成り立つ里山、その地域と都市部をつなぐのが市民による森づくり。こんな形の、みんなが関わる森づくりがたくさん広がってほしいな、と考えさせられました。

札幌会場では森を楽しむイベントの企画会議ワークショップ。グループに分かれて、みんなが試したくなる企画がたくさん生まれましたよ。こんな風に森づくりを楽しむ輪が、北海道中に広がるといいですね。



森づくりは人づくり 円山動物園と環境教育! どんぐりプロジェクト

9/24(日) 秋、動物たちは木の実を探してよ

今年度3回目は秋のプログラム。森では野生のエゾリスに出会ったり、動物園の中では飼育員さんにエゾリスやエゾシカが木の実を食べる話を聞いたりしました。自分たちがひろったどんぐりを目の前で動物たちが食べるのが、なんだか不思議な気分。ひろったどんぐりはポットに植えて持ち帰って、木の赤ちゃんを育てることに挑戦しています。

1/12(土) スノーシューで冬の森をたんけん!

冬の円山は雪の中。4回目は雪の森の動物たちです。スノーシューを履くのが初めての子どもたち、自由に森の中を歩いて動物の痕跡をたくさん見つけました。冬の森の動物たちは食ったり食われたり大変です。そんな動物の生態と生き残り戦略を、骨や毛皮、そして動物園の動物の顔つきから学ぶ、ちょっとディープな動物講座で今年度は終了。来年も来てね!



野生のリスにあえたよ!

雪の森を歩くの楽しいよ!

Sponsors

2018年度 コープ未来の森づくり基金 ご協賛を頂いた企業・団体様
 コープ未来の森づくり基金は、下記の企業・団体の皆様をはじめとする多くの方々に支えられて運営しています。

- | | | | |
|--|---|--|---|
| アサヒビール(株)
味浅利佐助商店
味の素(株)
味の素AGF(株)
味天塩
一正蒲鉾(株)
五木食品(株)
伊藤園
伊藤食品(株)
イトウ製菓(株)
伊藤ハム(株)
岩下食品(株)
岩田醸造(株)
株宇治園
内堀醸造(株)
株梅のひさぎ
エースコック(株)
江崎グリコ(株)
エスピー食品(株)
越後製菓(株)
エバラ食品工業(株)
大塚食品(株)
大塚製菓(株)
株大森屋
株小川生菓
オタフクソース(株)
株小野園
オハヨー乳業(株)
株小原
カゴメ(株)
加藤産業(株)
かどや製油(株)
株金市商店
カネカ食品(株)
株カネカシーフーズ
かねさ(株)
株カネソ227
カネ増製菓(株)
カバヤ食品(株)
上北農産加工(株)
かも川手延素麺(株)
カルピス(株)
カンロ(株) | キヨーコーヒー(株)
株菊田食品
北日本フード(株)
キッコーマン(株)
キッコーマン食品(株)
久順銘茶
キュービー(株)
共立食品(株)
玉露園食品工業(株)
キリンビバレッジ(株)
キング醸造(株)
クラシエフーズ(株)
コアレックス道栄(株)
株湖池屋
合同酒類(株)
国産産業(株)
国分グループ本社(株)
小西酒造(株)
株坂口製粉所
札幌酒造工業(株)
サッポロビール(株)
株札幌まるなま水産
南スニタレーディング
サハラ(株)
沢の鶴(株)
三育フーズ(株)
三幸製菓(株)
サントリーフーズ(株)
株ジーエムビー
株シー・ファーム
株シゼン・食品
信濃産業(株)
昭和産業(株)
株白子
株新進
歯舞漁業協同組合
ハラダ製菓(株)
ひかり味噌(株)
株ビッグエッグ札幌
株ビックスコポレーション
福山醸造(株)
フジッコ(株)
伏見蒲鉾(株) | 株不二家
フタバ食品(株)
フルタ製菓(株)
ブルドックソース(株)
株ブルボン
ベル食品(株)
株宝幸
株ホクリヨウ
ホクレン農業協同組合連合会
ポッカサッポロフード&ビバレッジ(株)
北海道コカ・コーラボトリング(株)
株北海道日水
株ホッカン
株堀川北海道事業部
前田製菓(株)
マルカイコーポレーション(株)
株マルコメ
株丸三北栄商会
株マルトモ
株マルナカ
株マルニチロ
丸美屋食品工業(株)
株まんでん
株みずすコーポレーション
ミツイシ(株)
株Mizkan
三本コーヒー(株)
南みやけ食品
株明治
株桃屋
株森井食品
株森永製菓
株森永乳業
モンデリーズ・ジャパン(株)
株ヤクルト本社
ヤマザキ製パン(株)
株大和屋食品
株UHA味覚糖
株横山食品
理研ビタミン(株)
株あさの
アサヒグループ食品(株) | 株味のちぬや
イトアンド(株)
岩塚製菓(株)
江口製菓(株)
株江戸屋
株岡畑農園
株岡物産(株)
株加藤美峰園本舗
株亀田製菓
株カルビー
株北川製菓
株北日本食品販売
株南紀の国食品
株ギャバン
株熊手蜂蜜
株ケイアイフーズ
株南幸伸食品
株佐々直
株サッポロウエシマコーヒー
株札幌バリ
株サハラ(株)
株サンマルコ食品
株ジェーシー・コムサ
株タカキベーカリー
株南中田食品
株ニチレイフーズ
株ハウスウェルネスフーズ
株ヒゲタ醤油
株ヒロツク
株富士商会
株ふじや食品
株ポールスタア
株ホクト
株北海道キリンビバレッジ
株ぼんま
株マリンフード
株丸善
株三島食品
株ヤヨイサンフーズ
株UCC上島珈琲株
株イーバック
株シーズシハラ(株)
株サントリービバレッジサービス
株ANAフーズ(株) (順不同) |
|--|---|--|---|



あすもりの活動を伝えます
 11月24日にプレオープンしたのは、「トドック エコステーション2」。コープさっぽろエコセンターの敷地内に建てられた施設で、あすもりの活動や森づくりの大切さを展示で紹介いたします。子どもたちも楽しめる大きな絵本も。グランドオープンは2019年6月に予定しています。みなさんもぜひ遊びに来てください。



楽しんで学ぶ森づくりのこと!

できたばかりのエコステ2はこんな建物

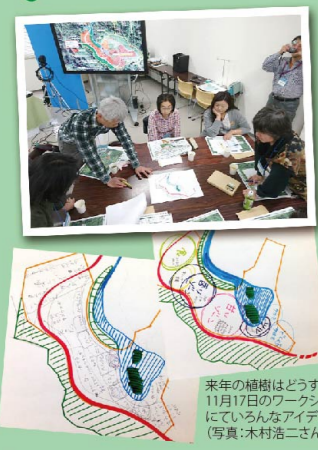
TODOK Ecostation2

見学をご希望の際はあすもり事務局までお問い合わせください。

Fの森 ワークショップ2018

2019年度の植樹計画は。

Fの森ワークショップも後半。来年度はどんな木を植えて、どんな森にしようか相談です。来年度はいいよFの森の最奥地、未開地エリアを開拓します。歩いた記憶を頼りに、どんな地形だったか、100年後はどんな森にしたいかを想像しながらみんなでアイデアを出し合いました。細かい樹種や配置は4月ごろに決まる予定です。来年度もワークショップで森への学びを深めましょう!



来年の植樹はどうする? 11月17日のワークショップにいろいろなアイデアが (写真:木村浩二さん)

Present アンケート&プレゼント

「モリイクvol.17」いかがでしたでしょうか。今後の紙面づくりのために、アンケートにご協力をお願いします。

- Q1 モリイクを読んだ感想をお聞かせ下さい。
 Q2 面白かった記事・つまらなかった記事はどれですか? 右から3つずつお選び下さい。
 Q3 森づくりの活動に参加したことがありますか? (はい・いいえ)
 Q4 コープ未来の森づくり基金の活動へのご意見があればお聞かせください。
 Q5 取り上げてほしい記事のテーマがありましたらお書き下さい。

- 巻頭コラム (P2)
 釧路湿原の保全 (P3~7)
 木づかい (P8) 大きな木の小さな物語 (P9)
 森のキモイ!キレイ? (P10,11)
 木育エッセイ (P12)
 コープの森づくり (P13~15)



PRESENT!
 アンケートに回答いただいた方から抽選で2名様に、鈴木果澄さんが描いた、森を感じる絵のメッセージカード(5枚)とクリアファイル(2枚)のセットをプレゼントします。

応募方法
 アンケートの回答を記入の上、住所・氏名・年齢・連絡先を明記の上、はがき、FAX、メールにてお送り下さい。プレゼントの当選は発送をもって替えさせていただきます。
 応募締切 5/30(木) 当日消印有効

コープさっぽろ基金事務局
 〒063-8501 札幌市西区寒券11条5丁目10番1号
 FAX: 011-671-5743
 メール: csapmori@todock.jp



携帯メールはこちらからどうぞ